炉辺荘のアン

（イングルサイド）

モンゴメリ・村岡花子訳

新潮文庫

Title: ANNE OF INGLESIDE
Author: Lucy Maud Montgomery
Copyright © 1939 by Harrap Publishing Gro
Japanese language paperback rights arrange
with Harrap Publishing Group Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

炉辺荘のアン（イングルサイド）

―第七赤毛のアン―

新潮文庫　モ－4－7

Published 1958 in Japan
by Shinchosha Company

昭和三十三年十二月二十五日　発行
平成　元　年十一月十五日　六十二刷改版
平成　二　年十二月十五日　六十八刷

訳者　村岡花子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六－五一一一
編集部（〇三）二六六－五四四〇
振替東京四－八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Midori Muraoka 1958　Printed in Japan

ISBN4-10-211307-X C0197

新潮文庫

炉辺荘のアン
（イングルサイド）

新潮社版

炉辺荘（イングルサイド）のアン

―第七赤毛のアン―

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　なつかしのアヴォンリー

「今夜の月明りはなんて白いのでしょう」と、アン・ブライスはひとりごとを言った。ダイアナ・ライトの家の玄関へと庭の小道を歩いていくところで、塩気を含んだそよかぜに小さな桜の花びらが散ってきた。

アンは一瞬立ち止り、過ぎ去った昔からいままで愛しつづけている丘や森を見まわした。なつかしいアヴォンリーよ！　グレン・セント・メアリーがここ数年来のアンの住みかとなっていたが、しかし、アヴォンリーにはグレン・セント・メアリーにはないなにかがあった。いたるところでアン自身の亡霊と出会った……もとのたのしい生活のこだまが少しも薄れずにまわりをとりかこんでいた。目にふれるところどこにでもなにかしら美しい思い出があった。行き馴れたそちこちの庭には過ぎし年月のばらがすべて咲いていた。いつもアンはアヴォンリーへ帰ってくるのがうれしく、今度のように悲しい理由で帰郷してさえそうだった。アンとギルバートはギルバートの父の葬式をおこなうためにきたのであり、アンは一週間滞在していた。マリラもリンド夫人もアンをすぐ帰すには忍びなかった。もとの玄関の上の部屋はいつでもアンのためにとってあり、到着した晩アンが部屋に行ってみると、リンド夫人

の心づくしの春の花のみごとな花束が置いてあった。アンがそれに顔を埋めると、忘れられない過去の月日の香りがそのままたちこめているように思われた。そこには昔のアンが彼女を待っていた。深いなつかしい喜びが胸をゆすぶった。破風部屋はアンを抱き、かこみ、とりまき、つつんだ。リンド夫人が編んだリンゴの葉模様の掛け布団と、これもリンド夫人が鉤針で編んだ幅広のレースの飾りがついた枕にはしみ一つなかった……床に敷かれたマリラの手製の敷物……遠い以前のここでのはじめての晩、泣き泣き眠りついた、小さな孤児の平らな額をうつした鏡などを、アンはいとおしげにながめた。アンは自分が五人もの子持ちの幸福な母親であることも……女中のスーザンが炉辺荘の家でまたもやせっせと不可思議な毛糸靴を編んでいることも忘れ、ふたたびグリン・ゲイブルスのアンに返っていた。清潔なタオルを持ってリンド夫人が部屋にきてみると、アンはまだ夢みるように鏡に見入っていた。

「あんたがまた帰ってきてくれてほんとうにうれしいですよ、アン、まったくのところ。あんたが行ってしまってから九年になるけれど、マリラもわたしもまだあんたがいないのが寂しくてたまらなくてね。デイビーが結婚してからは以前ほど寂しくはなくなったけれどね。ミリーはほんとうにいい子ですよ……あのパイといったら！……なんにつけても縞りすのように知りたがりやだけれどね。けれどわたしは前から言ってもいるしこれからも言うことだけれど、あんたのような人はだれもいませんよ」

「ああ、でも、この鏡はごまかせないわ、おばさん。『お前はもとのように若くはない』とはっきり言っていますもの」

と、アンはすねたように言った。

「色艶をよくもたしているではないかね」と、リンド夫人は慰めた。「もちろん、もともとあんたはたいして顔色はよくなかったけれどね」

「とにかく二重顎になる気配はまだないわ」

アンははしゃいだ声を出した。「それにあたしのもとの部屋があたしを覚えていてくれますもの、おばさん。うれしいわ。帰ってきてみたら部屋があたしのことを忘れていたなんていったらがっかりしますもの。それにまたお化けの森から月がのぼるのを見られるのはすてきだわ」

「まるで空の大きな金貨みたいじゃないかね？」

リンド夫人は途方もない詩的な飛躍をとげた気がし、マリラがその場で聞いていなくて助かったと思った。

「あの月を背にそびえている、先のとがった樅をごらんなさいな……それからいまでも銀色の空に腕をさしのべている窪地の白樺を。いまでは大木になっているわ……あたしがここへきたときにはほんの子供の木だったのにね。それを思うとあたしもちょっと年とった気になるわ」

「木も子供のようなものですよ。ちょっと背を向けているあいだに大きくなることは恐ろしいくらいだものね。フレッド・ライトを見てごらん。まだ十三だけれど、背は父親ほどもあるじゃないかね。夕食には熱いチキン・パイがあるし、わたしはあんたにレモン・ビスケッ

トを焼いたのですよ。その寝台で眠るのにちっとも心配はいらないからね。わたしがきょう、敷布を風にあてたのを知らないで、マリラがもう一度風にあて……それを知らないでミリーが三度目に風にあてたのだからね。メアリー・マライア・ブライスが明日出かけてくるといいがね。あの人はもとからお葬式が好きだからね」

「メアリー・マライアおばさんは――お父さんのいとこでしかないのにギルバートはいつもこう呼んでいるのよ――あたしのことをいつも『アニー』と呼ぶのよ」アンは身震いした。

「あたしが結婚してからはじめて会ったとき、おばさんは『ギルバートがあんたを選んだとは不思議だね。あの子ならいくらでもいい娘をもらえたのに』とこう言うのよ。たぶんそれであたしはあのおばさんが好きじゃないのかもしれないわ。ギルバートだって好きじゃないのよ、ギルバートは身びいきが強いから口に出しては言わないけれど」

「ギルバートも長く滞在するのかね？」

「いいえ、明日の晩帰らなくてはなりませんの。重態の患者をおいてきましたからね」

「ああ、そうさね、母親も去年亡くなったし、いまではギルバートをアヴォンリーにひきとめるものもたいしてないだろうからね。ブライスさんは奥さんに死なれてからは力を落としてね。……なんの生き甲斐もなくなってしまったのですよ。ブライス家ではもとからそうでね……この世のものにあんまり愛情をそそぎすぎるのですよ。アヴォンリーにあの一族の者が一人も残っていないと思うと、ほんとうに悲しいね。立派な古い家柄だったからね。ところがスローンの一族といったらいくらでもいるのだからね。スローンはやっぱりスローンで

すよ、アン、永久にね。アーメン」

「スローンの人たちはいくらでもふえればいいわ、あたしは夕食のあとで月の光をたよりに果樹園じゅう歩きまわるから。しまいには寝床にはいらなくてはならないでしょうが。月夜に眠るなんて、時間がもったいないといつも考えているのですけれどね……でも、早く目をさましてお化けの森からさしそめる明け方のかすかな光を見ることにしましょう。空は珊瑚色になり、駒鳥が気取って歩きまわることでしょうよ……たぶん小さな灰色の雀が窓敷居にとまるかもしれないし、金色や紫色の三色すみれも見られるでしょうよ……」

「ところが六月百合の花壇をすっかり兎が荒してしまったのですよ」

と、リンド夫人は悲しそうに言うと、よたよた階下へおりていったが、これ以上月の話をしないですんで内心ほっとした。そういう方面ではアンはもとから少し変わっていたし、もうなおる見こみもたいしてない。

ダイアナがアンを出迎えに小道をつたってきた。月明りで見てさえダイアナの髪はいまなお黒く、頬はばら色で、晴れやかな目をしているのがわかった。しかし、月光はダイアナが昔よりも少し肥ったことをかくせなかった……しかもダイアナはもともとアヴォンリーの人々の言う『やせっぽち』ではなかったのである。

「心配しないでね、あたし長居はしないからね」

「まるであたしがそうだったら困るとでも思っているようだわ」と、ダイアナが非難した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「今夜披露宴へ行くよりあんたといっしょにすごすほうがどんなにいいかしれないということがわかっているでしょうに。まだ半分もあんたを見足りないのにあんたはもう明後日帰ってしまうんですもの。でも、フレッドの弟でしょう……どうしても行かなくちゃならないのよ」

「もちろん、行かなくちゃならないわ。あたしただちょっとひとっ走りしてきただけなのよ。もとの道からきたのよ、ダイ……妖精の泉のそばを通ってね……お化けの森を抜けて……あんたの家のあの木かげの多い庭のそばを通り……ウィローミアも通ってきたの。足をとめて、あたしたちがいつもしたようにさかさに水にうつっている柳も見てきたわ。ずいぶん大きくなったのね」

「なにもかもね」ダイアナは溜息をついた。「フレッド坊やを見るとねえ！　わたしたちはみんなたいした変わりようだわ、あんたは別だけど。あんたはちっとも変わっていないわ、アン。どうしてそんなにほっそりしていられるの？　わたしを見てちょうだい！」

「ちょっとばかり奥さんらしい貫禄がついたわね、もちろん」と、アンは笑った。「でも、あんたは中年の肥りすぎだけはのがれているわ、ダイ。あたしが変わらないといえば……そうね、H・B・ドネル夫人はあんたとおなじ意見で、お葬式のとき、あたしにちっとも老けていないと言いなすったわ。でも、ハーモン・アンドリュウスのおばさんはそうじゃないの。『あらまあ、アン、なんて老けたんでしょう！』とこう言うのよ。みんな見る人の目――というか気持によるのね。あたしも少し年をとったという気がするのは雑誌の挿絵を見るとき

だけよ。描いてある主人公も女主人公もあたしにはあまりに若すぎるように見えてきたの。でもかまわないわ、ダイ、明日はあたしたちもう一度娘時代に返るんですもの。そのことを話しにきたのよ。午後と夕方をあけておいてもとよく行ったところを全部まわってきましょうよ……一つ残らずね。春の野を越え、あの羊歯のしげる古い森を抜けましょうよ。あたしたちが大好きだったなつかしいものをみんな見たり、丘を見たりしたらまた若返るわ。春という季節にはどんなことでもできないことはないんですものね。二人とも親としての気持や責任など感じるのはやめて、リンドのおばさんが心ひそかにあたしのことを考えているようにせいいっぱいばかげた振舞いをしましょうよ。年がら年じゅう分別くさくしていてはちっともおもしろくないじゃないの、ダイアナ」

「なんてまあ、あんたらしいことを言うんでしょう！　わたしもそうしたくてたまらないわ。でも……」

「でもなんて言いっこなし。『だれが主人たちの夕食を用意するかしら』って考えているのがわかっていてよ――」

「そういうわけでもないのよ。アン・コーデリアがまだ十一だけれど、わたしに負けずに上手に主人たちの食事ごしらえができますからね」と、ダイアナは自慢そうに言った。「どちらにしてもあの子が夕食をつくることになっていたのよ。わたしは婦人会へ行くことになっていたのでね。でも、やめるわ。あんたといっしょに行くわ。まるで夢が実現したようなものね。だってね、アン、よく夕方わたしはすわってわたしたちがまた小さな女の子になった

つもりになるのよ。夕食も持っていきましょうね……」
「ヘスター・グレイの庭の奥で食べましょうよ……ヘスター・グレイの庭はまだあそこにあるでしょうね？」
「あると思うわ」ダイアナは心もとなさそうだった。「結婚してから一度も行ったことがないのよ。アン・コーデリアはずいぶん歩きまわるんだけれど、でも、あまり家から遠く離れたところへ行ってはいけませんといつも言いきかせているのよ。あの子は森をうろつくのが大好きなの。いつか庭で一人でしゃべっているのを叱ったら、一人でしゃべっているのではない、花の精に話しているのだと言うのよ。あんたがあの子の九つのお誕生日に送ってくだすったあの小さなピンクのばらの蕾がついているお人形のお茶道具ね、一つもこわれていないのよ……あの子はそりゃあ注意深いの。あれは三人の緑の人たちがあの子のところへお茶にきたときしかつかわないのよ。だれのことをそう考えているのか聞き出せないの。たしかにある点ではアン、あの子はわたしよりもあんたにずっと似ているわ」
「たぶん、シェークスピアが認める以上のことが名前にはあるのかもしれないわ。アン・コーデリアの空想を叱らないでね、ダイアナ。あたしいつも、二、三年お伽の国ですごさない子供たちをかわいそうに思うのよ」
「オリヴァー・スローンがいまわたしたちのところの先生なのだけど」ダイアナはおぼつかなげに言った。「あの人は文学士でしょう、お母さんのそばにいられるようにと一年この学校を引受けたのよ。オリヴァーは子供たちを現実に直面させなければいけないというのよ」

「あんたがスローン一族の片棒をかつぐのをこの年になって聞くとはね、ダイアナ・ライト？」

「そうじゃないのよ……そうじゃないのよ……そうじゃありませんとも！　あんな人なんかちっとも好きじゃないわ。あの一族全部がそうだけど、あの人もぐりぐりっとした、人をじろじろ見る青い目をしているのよ。それにわたしはアン・コーデリアの空想を気にしていないもの。もとのあんたのようにあの子の空想も美しいのよ。大きくなるにつれてじゅうぶん『現実』になじむと思うわ」

「では、それできまったわ。二時ごろグリン・ゲイブルスへいらっしゃいな、二人でマリラの赤葡萄酒を飲みましょうよ……牧師さんとリンドのおばさんが反対するんだけど、マリラはあたしたちをしんから悪魔じみた気分にさせるためにときどきこしらえるのよ」

「あのお酒でわたしを酔っぱらわせたあの日のことを覚えている？」と、ダイアナはくすくす笑った。アン以外の者がこの言葉をつかったら気にかけたであろうが、アンが『悪魔じみた』と言ってもダイアナは気にならなかった。アンが心からそんなつもりになっているのでないことはだれもみな知っていた。それはアンの口癖にすぎなかった。

「明日はあれこれ思い出してすごしましょうね、ダイアナ。もうこれ以上おひきとめしないわ……フレッドが馬車を出してきなすったわよ。あんたの服はすてきだこと」

「この結婚式のためにフレッドが新調してくれたのよ。あたらしく納屋を建てたから、そんな余裕はないと思ったけれど、フレッドがよその連中がみんなせいいっぱい着飾ってくるの

に、自分の家内が招かれても行かれないというような格好はさせないつもりだと言うの。男の言いそうなことじゃないの？」

「まあ、あんたはグレンのエリオットさんのようなことを言うのね」アンはきびしくたしなめた。「その傾向に注意しなくてはいけないわ。男が一人もいない世界に住みたいとでも思うの？」

「恐ろしいでしょうね」と、ダイアナも認めた。「はい、はい、あなた、すぐ行きますわ。ええ、もういいのよ！　それじゃ明日ね、アン」

アンは帰り道に妖精の泉のそばで立ち止った。この古い小川がアンはたいそう好きだった。この流れはかつてとらえたアンの子供時代の笑い声を一つ残らずとどめており、それをいまふたたび、耳をすましているアンに聞かせているかのようだった。自分の昔の夢……それが澄んだ水泡にうつって見えた……昔の誓い……昔のささやき……それをすべて流れはとどめており、つぶやいた。しかし、それに耳を傾ける者はながいあいだ聞いてきたお化けの森の賢いえぞ松の古木のほかはだれもいなかった。

第二章　アンの双子たち

「なんていいお天気でしょう……わたしたちにあつらえ向きじゃないの。でも、気まぐれ

日和じゃないかしら……明日は雨になるわよ」

と、ダイアナが言った。

「かまわないわよ。たとえ明日は日光が消えうせようとも、きょうは日光の美しさを満喫しましょうよ。たとえ明日は別れなくてはならなくても、きょうはお互いの友情をあたためあいましょうよ。あの長い金緑色の丘を……あの青くかすんだ谷をごらんなさいな。あれはあたしたちのものよ、ダイアナ。あのいちばん遠くの丘がアブナー・スローンの持物として登記してあってもかまわないわ……きょうはあれはあたしたちのものなのよ。西風が吹いてるわ。西風が吹くとあたしはいつも冒険的な気分になるの。あたしたちは申し分のないぶらぶら歩きができるわ」

そのとおりだった。昔なつかしい場所を残らず……恋人の小径、お化けの森、アイドルワイルド、すみれの谷、樺の小道、水晶の湖などを二人はふたたび訪れた。多少の変化はあった。二人が遠い昔おままごとの家をつくったアイドルワイルドの小さな輪形に生えた樺の若木は大木に成長していた。ながいあいだ人が足を踏み入れない樺の小道は羊歯でおおわれていたし、水晶の湖はまったく跡形なく消えて、あとにはじめじめした、苔の生えた窪みがあるだけだった。しかし、すみれの谷はすみれで紫色に染まり、ギルバートが以前森の奥で見つけた実生のリンゴの木がいまでは巨木となっており深紅色の小さな蕾をいっぱいつけていた。

二人は帽子をかぶらずに歩いた。日を受けてアンの髪はいまなおみがきぬいたマホガニー

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com